

## 日本の伝統と魂に描かれた稲作と豊穡の歴史とその神々

### 1 勤労感謝の日とメーデー

11月23日は「勤労感謝の日」という祝日が日本ではあります。全世界的には5月1日が「メーデー」ということで労働者の日となっています。

そもそも「メーデー」とは「May Day」で、直訳すると「五月祭り」ということになりま。もともとは5月に入って夏の訪れを祝う祭がヨーロッパの各地で催されてきたもので、夏になってこれから頑張るとい意味合いで、春から夏への季節の変わり目を祝う、日本でいうと節句のような形で祝われてきた日でした。この日には、各地でワインを開け、食事を豪華に行うというような感じで、ホームパーティーが催されたのです。

メーデーが労働者の日となるのは、1886年5月1日に合衆国カナダ職能労働組合連盟（後のアメリカ労働総同盟、AFL）が、シカゴを中心に8時間労働制要求の統一ストライキを行ったのが起源といわれています。1888年にAFLは引き続き8時間労働制要求のため、1890年5月1日にゼネラル・ストライキを行うことを決定しますが、政府によって弾圧されたり、暗殺事件なども発生してしまい、そのデモが頓挫します。そのために、AFL会長ゴンパースは、翌年の1889年の社会主義者の国際組織で、当時労働者の国際的組織であった第二インターナショナル創立大会で、AFLのゼネスト実施に合わせて労働者の国際的連帯としてデモを行うことを要請し、そして、これが決議されることとなります。決議された翌年1890年の当日、ヨーロッパ各国やアメリカなどで第1回国際メーデーが実行されます。国際的な労働者の日としてメーデーが認識され、なおかつメーデーが「労働者の祭」の日とされるのは、この時からになります。

このような成立であるために、中国や旧ソ連など社会主義国ではメーデーは非常に大きな祭りとして、長期の休暇になる場合が少なくありません。しかし、アメリカなどは別に「レイバー・デイ」など、政府が主催する労働者の日を定めています。政治的な意味合いから、国際的というよりは社会主義的、共産主義的な労働者の日の設定に従うのをよしとしなかったのではないのでしょうか。ちなみに、アメリカでは9月の第1週で夏の終わりを告げる祝日となっています。夏の終わりを告げることが、夏にがんばった労働者のお祭りということになるのです。また、オーストラリアでは伝統的に5月に祝う（5月1日に限らず5月の祝日に行うという感じで決められています）エリアと10月に祝うエリアと3月に祝うエリアがあります。

さて、日本では、特にこのような共産主義とか社会主義というような政治的、イデオロ

ギ一的な対抗手段によるものではなく伝統的に11月23日に新嘗祭が宮中行事としてまたは日本全国の神社でおこなわれています。

古代より11月の下の卯の日（中の卯の日）に行われるのが例でしたが、明治になり太陽暦が使用されるのに伴い「11月23日」に定まりました。大事な行事として飛鳥時代の皇極天皇の御代に始められたと伝えられています。「豊葦原の瑞穂の国」の祭祀を司る最高責任者である天皇が、その年にとれた新穀を天神地祇に供えて、農作物の収穫に感謝するとともに、自らも初めて召し上げられる祭典です。この日は祭日で、全国の農山漁村ではもちろんのこと、それぞれの地方で神社に新穀を捧げ、その年の収穫を神々に感謝してお祝いをしてきました。戦後「勤労感謝の日」となったのちも、新嘗祭は、元々このように天皇と国民とが一体となって天地自然の神々に感謝し、収穫を喜び合う全国的な祭典だったのです。

このように、日本の勤労感謝の日は、メーデーが労働者の祭りとされたものと異なり、すでに1300年以上の歴史を持っている伝統です。当然に、皇極天皇の時代といえば「皇極4年」には、あの有名な大化の改新があった時代です。まだ日本の都が飛鳥にあった時代ですね。時代背景としては、聖徳太子による仏教的な道德教育と同時に陰陽五行などの中国的な思想が入り、また、冠位十二階で日本の統治機構が出来上がってきた時代です。当然に民衆や国民が主導、現在のような民主主義によるような内容があるはずはないのです。では、この時代にだれに対して「感謝」していたのでしょうか。ここには古代からの日本人の米や稲作に対する考え方が色濃く反映されているのです。そして、その考え方が現代にも通じているのが「勤労感謝の日」なのかもしれません。

## 2 新嘗祭

新嘗祭は、言うまでもなく、新しく収穫された米を神様に捧げて感謝を表す秋祭りです。その起源は古く、既に日本の神話の中で、天上の高天原を統治しておられ、天皇陛下のご先祖でもある天照大御神自身が、新嘗祭を行っておられたと記されています。その天照大神が地上の葦原中国に降っていかれる孫の邇邇芸命（ニニギノノミコト）に稲を授けられ、これで国民を養いなさいと命じられたことにあります。葦原中国とは、今でいう日本の国のことですね。

邇邇芸命は、生後すぐに、天照大御神と高皇産霊神から国土の支配者として天降るようにと命令され、三種の神器を授けられ、猿田毘古神に先導されて、日向国高千穂の峰に降臨したのです。いわゆる天孫降臨の伝説がこれに当たりますね。木花開耶姫を見初め妻にしたのですが、いっしょに奉られた姉の磐長姫は醜かったので嫌って妻にしなかったのです。それで姉妹の父大山祇神が呪いをかけ、代々の天皇の寿命が、岩のように永久ではなく、花のように短くなるようにしたのだという伝説のある神です。もちろん、この子孫が今の天皇陛下になるのです。

邇邇芸命の父は忍穂耳命（オシホノミミノミコト）といい、天照大御神の子供です。邇邇芸命よりも前に葦原中国を治めるように言われますが、いまだ日常が安定していないとして引き返してしまいます。その子供である邇邇芸命はホノニギノミコトと呼ばれたりもします。この名前の〈ホ〉は稲穂の穂の意味で、〈ニギ〉は「賑わう」とか「賑やか」という意味です。ようするに邇邇芸命の本当の呼び名である「ホノニギノミコト」は稲穂が豊かに実ることを予祝してつけた名称ということになります。そして、その予祝に対して、天照大御神は「新嘗祭」を行うように言うのです。まさに「ホノニギ」を行うために必要な「祭」が新嘗祭ということになるのではないのでしょうか。

では新嘗祭はどのような儀式でしょうか。宮中の儀式に関しては、実際に見ることはできないという形になります。そのために、伝えられたものであかいかい知るものとしなければなりません。同時に、全国の神社でも行っているのです、その神社の祭儀を参考してお伝えいたします。

まず、新嘗祭の一日前に「鎮魂の儀」が行われます。「鎮魂の儀」は、天皇陛下、皇后陛下、皇太子殿下、皇太子妃殿下の御魂を鎮め奉り、ご寿命のご安泰と長久とを祈願する祭儀で、賢所構内の綾綺殿において行なわれます。

この「鎮魂の儀」は、『古語拾遺』に「凡そ鎮魂之儀者、天鈿女命之遺跡」とあり、天岩戸の故事を起源とするとされています。大宝令に「仲冬下ノ卯大嘗祭寅ノ日鎮魂祭」とあり、その後制度化されて新嘗祭の儀式の一つとされてきています。

このように、皇室では、儀式のために前日から身を清め、魂を鎮めて儀式に臨みます。

新嘗祭は、天皇陛下が神嘉殿において、その年に収穫された新穀のお初穂を天照大神をはじめ八百万の神々にお供えになり、また自らも召しあがる儀式です。皇太子殿下も神嘉殿にご出席になりご拝礼になる。この祭儀を新嘗祭神嘉殿の儀といいます。また天照大御神を祀る伊勢神宮にも勅使を差し遣わされ、内宮、外宮に幣物をお供えになります。これを神宮新嘗祭奉幣の儀といいます。また新嘗祭当日午後二時、宮中三殿に神饒、幣物を奉り、天皇陛下のご代拝があります。これを新嘗祭賢所、皇霊殿、神殿の儀といいます。

新嘗祭神嘉殿の儀は、夜中のご祭典であって、「夕の儀」と「暁の儀」からなり、同様な儀式が二回行なわれます。

陛下は、お告文を奏上されます。陛下が奏上されるお告文には、五穀の豊饒を神々に感謝され、国家の平和や繁栄と国民の福祉をご祈願になられる内容になっています。そしてお告文が終わると、神々にお供えしたものとまったく同じ米のご飯、粟のご飯、白酒、黒酒などを陛下自らも神々と向かい合って召しあがります。私たちが神社で何らかの儀式に参加した時に行われる「御直会」と同じ趣旨であると考えていただければよいのではないのでしょうか。神様に奏上し、神様と同じ食事を行うことによって、神様と同化するという儀式の一つです。なお、ここで出てくる白酒とは、いわゆる濁り酒、そして黒酒とはあわや黒米でできたお酒で、「黒」とは言いながらも、真っ黒ではなく、薄い灰色で少し濁っているという感じです。しかし、神様にお供えする白い器の中で、または隣に並べられた白

酒に比べて、色が黒く見えることから黒酒といわれるようになっていきます。

この儀式の間、皇太子殿下は南庇の間の中央の拝座に着いてご拝礼になられています。庭上の幄舎におつきになっていた各皇族はじめ参列者は、神嘉殿正面木階下に参進し拝礼します。

このようにして、新穀の収穫を神に感謝するお祭りを行います。天皇の新嘗祭は、この天照大神のご命令に忠実にしたがっていることの証であり、その恵みに対する感謝の表明なのです。日本の天皇陛下の第一のお仕事は、ご祖先である天照大神を祀り、稲の豊かな稔りによって国家国民が繁栄し、幸福となることを祈られることなのです。

### 3 新嘗祭から見る「神々との生活の共有」

新嘗祭はこのようにして行われます。これが天皇の御代が変わり、新しい天皇の一回目の新嘗祭は「大きな新嘗祭」という意味で「大嘗祭」という祭りがおこなわれます。新しい天皇はどうしても行わなければならない重大な儀式とされてきました。

全国の田、昔は天皇の御領荘園の中から二つを占いで選び、そこでとれた新しい穀を新天皇が天照大御神に捧げる儀式です。神話の中ですが、現在の天皇陛下の先祖である邇邇芸命が、天上界にいらっしゃる祖父天照大御神によって言われた儀式を、新しい天皇が継承することによって、新しい天皇は、天照大御神の魂を引き継ぎ、天皇となる資格を身に着けるといわれているのです。まさに伝統の継承ですね。

これは、宮中だけの儀式ではありません。天照大御神をお祀りする伊勢神宮でも、またそのほかの神々をお祀りする日本の神社においても同じ趣旨のお祭りが行われます。これは、「神嘗祭（カンナメサイ）」といいます。

実は、今年話題になった伊勢神宮の式年遷宮も、この神嘗祭の大きなものなのです。式年遷宮といえば、建物の建て替えと御神体、特に三種の神器の移動ばかりが有名ですが、本来は、天照大御神に伝わる日本の神々に関する考え方が色濃く流れているのです。

日本人の場合、人間にも神や精霊が宿っていて、そのものが何もなければ力を発揮すると考えられていました。世界、と言うか当時の場合は日本ともならず村や国という地域という小さな世界ですが、その世界が不幸に見舞われたりあるいは思い通りにいかないと言うことになると、それは、自らの神々や自らの身体が悪い気や悪い霊に穢されているためと考えていたのです。

たとえば「障り」という単語があります。うまくいかない場合に「差し障り」など「差し支える」という意味で使う単語ですが、これは悪い霊が「触る」事によって良い方向に行くことの「障害になる」という考え方から、このような言葉になっています。日本語の中には、このように、神々の考え方から出てきた言葉がたくさんあるのです。

天照大御神を祀った伊勢神宮は、毎年毎年、日本国全体、場合によっては世界全体の平和や五穀豊穰、繁栄や幸福を祈願している間に、どれだけ穢れをどれだけ払っていても、

どうしても穢れがたまってしまふ。そのために、そのたまった穢れを落とすと言う意味で、神殿ごと建て替えてしまい、神様が引っ越すと言うことになります。そのように引っ越すことによって、穢れのない新たな神殿で新たなパワーを発揮すると言うことになるのです。

そして、その新しくなった神殿に神様がお移りになった後に新穀をお供えし、そして新たなお祈りをささげると言うことになります。まさに式年遷宮は、「大嘗祭」ならぬ「大神嘗祭」と言うことができるのかもしれませんが。

単純に「式年遷宮」として神様がお移りになられるところばかりが注目されていますが、本来の神様の意味や、神様の儀式全般を考えれば、新たな神殿でお供えをし、神様が、新たな神殿に落ち着かれ、新たな力を発揮されるということが重要であり、またその最も重要な儀式を知らないでお引越しばかり注目するのはいかがかと思えます。

さて、逆に言えば「新穀をお供えする」と言うことは、それだけ重要な内容になります。

まさに「神様と一緒にものを食べる」と言う行為が非常に神聖なものであるとされ、同時に神様に食事を差し上げると言うことに関して非常に大きな力があるとされているのです。まさに、日本人は「食べる」と言う行為を、非常に神聖なものとして大切にしてきました。その食べる行為の元である穀物の五穀豊穰を祝うものであるから、当然に、新嘗祭が日本国において、もっとも神聖な、そして最も重要なお祭りであるとされるのです。

しかし、毎日食事をしているわれわれにとって、「食べるということが神聖な行為」と突然言われても、あまり感じないかもしれません。そこでまず簡単に食事に関する現代にも生き残っている意識を考えて見ましょう。

たとえば、「同じ釜の飯を食った」というと、「非常に親しい仲間」とであると言う感じになります。これは、「食事を一緒にする」と言うことではなく「生活を共にする」と言う意味になり、もっと言えば、その人の内面の部分まで共有していると言うことになります。まさに、食事と言うものは、食事にもすべて神が宿っていると言う感覚があります。

まさに「同じ釜の飯を食った」という感覚は「同じ神を共有している」ということであり、その内容は「同じ常識を持っている」とか「同じ生活習慣を持っている」ということになるのです。

新嘗祭または神嘗祭は、この同じ言い方をすれば、「天照大御神と同じ飯を食った」ということになります。これは「天照大御神と生活を共有している」または「天照大御神と同じ生活習慣を共有している」ということにほかなりません。そのことによって、日本を平和に保つということに関して、天照大御神がいらっしゃる天上界と生活を共有し、同じ考え方、同じ生活常識で日本の国を統べるということを意味しています。

当然にそのために、「天上界」または「天照大御神」と現在の日本をつなぐ儀式があり、それが新嘗祭であり、また全国の神社で行われる神嘗祭になるのです。「食べる」ということが、単純に栄養を補充することだけではなくその同じものを食べた人々との生活の共有や習慣の共有という意味合いがあるのではないのでしょうか。これは洋の東西を問わず、すべての人にある感覚のようです。例えばキリスト教においても「最後の晩餐」などから由

来する洗礼の時にパンを食べる儀式があります。また、古代ペルシャの精霊信仰では、日本と同じように農作物の生育などに関して、神々の進行の儀式がありました。これらに関しても、神々と様々なことを共有するということで同じような考え方になっています。その古代ペルシャの精霊信仰の影響を受けた仏教では、「解脱」「悟り」というように、自らが修行して仏の道に進むことに価値を見出しています。

神々または仏との習慣の共有ということは、まさに、すべての宗教で行われているといっても過言ではないことであり、そのことによって、ある程度の力を持つことが可能になるのです。

#### 4 食べるという行為の共通性と違い

さて、「食べる」ということがこのように宗教的な儀式になるということに関しては、各国で共通性があります。しかし、キリスト教では「パン」や「ワイン」であり、日本では「新米」もしくは「酒」が用いられます。この違いはいったいなんでしょうか。

これは西洋と日本の生活習慣に非常に関係があります。

西洋では、狩猟による肉食が通常でした。西洋の神々はキリスト教であってもそれ以前のギリシア神話に出てくる神々であっても、狩猟がうまくゆくこと、そしてその狩猟した獲物とともに食べるパンが主食になっています。食文化がこのようになっていますから、狩猟した獲物を象徴する「血」要するに「ワイン」と、主食であり大地の恵みである「小麦」からできる「パン」が、共有する食文化ということになります。一つのパンを分け合うことによって、そのパンを作る工程から、パンが焼けるまでの熱の入れ具合などが共有できます。まさに日本流でいえば「同じ釜で焼けたパンを食べた仲」ということになるのでしょうか。これは「神々からの恵み」を分け合うということが一つの内容になります。

一方、日本の場合は少し様相が異なります。米が主食でありなおかつ日本は農耕民族で稲作を中心にした農耕が中心であったことから、当然に稲そのものが神々からの恵みのものという感覚があったと思われれます。キリスト教のパンと同じ意味合いが「新米のご飯」には込められていたのではないのでしょうか。しかし「酒」は同でしょうか。

日本の神社の儀式には、必ず「酒」があります。「サ」とは稲の神の古語で、「ケ」とは「餉」という字になり、「朝餉」などという意味で使われます。このことから「酒」は「神様の食事」という意味になります。三々九度などで口にする酒は、まさに神様の食事を一緒に頂くことによって、神々と同じものを食べるという意味になるのです。ワインは、獲物となった獣の血を表すものでしたが、日本の場合は、神様の食べ物をおすそ分けしてもらおうということになります。

ではなぜ「酒」が「神様の食べ物」なのでしょう。

一つには、その材料が「米」であるということです。米は稲から作られます。イネの栽培の歴史は古く、紀元前 12~13 世紀頃の最古の文献『リグ・ヴェーダ』にイネ(vrihi)の

ことが書かれています。イネが栽培された当初は、おそらく山地・丘陵でアワ、ヒエ、キビなどの雑穀類とともに混作されており、その後、イネだけが独立して水田で栽培されるようになったものと思われます。稲の起源はメソポタミア文明の中心であった「肥沃な三日月地帯」といわれるチグリス・ユーフラテス川の中流あたりではないかといわれています。古代ペルシャの精霊信仰と一緒に日本に稲が伝わってきたのではないかとされています。稲は様々な品種改良を古代からおこなわれてきています。それでは日本人が3000年間もの長きにわたって利用している米、ジャポニカ種の祖先となるアジアイネの原産地は、いったいどこなのでしょう。現在最も有力なのが、中国の長江中・下流域とする説です。すでに紀元前5000年、浙江省河姆渡(かぼと)遺跡から、炭化米や稲穂の文様を描いた黒陶などがみつかっています。「イネ」という音も、「殷」という中国の古代国家の名前からきているというような説があります。実際様々な説がありますが、日本の稲は、日本に由来からも様々な品種改良され、日本の文化に適合したようになってきているのではないかと考えられます。

もともとこのように、「精霊信仰」と「稲」が一緒に伝わってきたということが一つあげられます。同時に、稲はその栽培の時に山から流れてくるきれいな水が必要です。そして太陽が必要で、そして土が肥えていなければできません。要するにいずれも自然の世界のものです。太陽は、そもそも「光」という「闇を照らすもの」として存在しています。そして光そのものが神々の力の一つであるとされています。日本の場合は、その太陽の神が「天照大御神」として天皇陛下の先祖ということになっています。また、山の神の上から流れてくるものが水です。山の神は「女性」であるとされており、天照大御神も女性であることを考えれば、いずれも「生む力を持った神々の力の結晶」として「稲」があるのです。

稲は、はじめのうちは、土の栄養分を吸収し太陽と水の恵みで育ちます。この時はまだ「緑」の色です。稲が育ってくると米を実らせて頭をもたげます。稲を作るにあたってかわったすべての神が、稲の養分とともに米の中に入り込み、神々の重さで稲が頭をもたげると考えられていたのです。そして稲がすべて「黄金」になり、水田の風景全体が金色に輝くようになるのです。まさに、稲そのものが「太陽と同じ色」になるということで、その神々が、「天照大御神」を中心にした天上界の食べ物と変化したことを意味するのです。

酒は、その神々が宿った米を発行させ、そして蒸留して、液体にしたものです。もちろん、作るにあたって、再度水を加え、そして木の樽など、森の恵みを受けて神々が宿った米が形を変えたものです。当然に通常のコメだけでも、様々な手が加わりそして神々の恩恵を受けているのに、それ以上の手を加え、神々が神の食するような役割に形を変えたものが「酒」ということになるのです。そして昔は、ある意味で酒をお供えしていると蒸発などして酒の量が減ったりすることに、よって「神々が召し上がった」ということを考えたのでしょう。

さて、ワインと酒、同じような意味合いであっても、その根底の部分では異なります。

西洋では神々の恵みを人間がわけるといことになるのに対して、日本の場合は神々と同じものを食べるという意味になるのです。人間が神々に同化し、そして神々と一緒になって国を治めるといった感覚、または結婚式などでは「子供を作り育てる」というような神の領域に及ぶことを、三々九度を行う男女が行うということになるのではないのでしょうか。

神々と同じものを食べる、それは神々が作った食材に、人間が手を加えて食べる。その食べたことによって人間の命が維持され、そして成長してゆくこととなります。そのことが、「いただきます」「ごちそうさま」という挨拶、そして「五穀豊穡の祭り」「収穫祭」というように神々に感謝しながら、その神々と一緒になって食材を作った人々にも感謝するという事ではないのでしょうか。

## 5 「食文化」と「包丁式」と「神々の儀式」

古来、日本人は、「食べる」という行為を、神聖なものと捉え、大切にしてきました。日本の神道の祭式は、その多くは祝詞をあげることと、食事や酒宴を儀礼化したものであるともいえます。日本人は、食事を通じて神の存在を感じ、神々から与えられた恵みに感謝し、自らとそして稲や魚など食材となるものの命の大切さを思い、それらの命をいただいて生きているという謙虚な気持ちを示すことによって、新たな恵みを神々に祈願するという事を行ってきているのです。

昔の人は「コメの中には七人の神様がいます」という言い方をしていました。そのようにして食べ物を粗末にすることを強く戒めていました。食材すべてがそうですが、人間がそのものを食べるということは、動物や植物の命をいただいているということです。その命をいただいているということに感謝しなければなりません。

第五十八代光孝天皇は、非常に料理が好きであり、自ら料理の素材を採取し、自らかまどの前に立ち、そして料理の腕を振るうほどの天皇でりました。「君がため 春の野に出て 若菜摘む 我が衣手に 雪はふりつつ」という和歌は、小倉百人一首に収められている、光孝天皇が自ら料理の素材を取りに、雪の中素材を取りにいった、ことを詠じた御歌、有名な「若菜摘み」です。いつも料理と料理の研究をしていたため、光孝天皇の御部屋は、料理のために使うかまどの煤で黒光りするくらいになっていました。そのために、光孝天皇は別名「黒戸の宮」と言われるほどであったといえます。

光孝天皇は、自分が料理を行うのに際し、さまざまな命を奪っていることに心を痛めていること、とはいえ、人間も食事をしなければ生きてゆけないとすることを相談し、その上で、食べ物に使われる素材のすべての命に感謝を、そして祈りをささげると言う意味において、俎板庖丁捌きの掟を定めるように四條中納言藤原朝臣山蔭卿に命じられたのです。そのようにしてできたのが、現代も四條司家四條山蔭嫡流第四十一代当代によってつがえられている「包丁式」です。包丁式は、陰陽五行や仏教など様々な思想によって、神々と食材となった命に対して食材と感謝の意を表し、そして、そのことによってより発展する



ような儀式を神々にささげるものなのです。平安時代からある日本食の文化の中には、当然にこのような思想があり、それが庶民の生活にも伝わることによって食文化が形成されているのです。

しかし、現代では、食事はせいぜい人と人との交流の場にすぎなくなり、自分の存在の根源や背景に思いをいたすという意味合いは大変薄れてきてしまいました。それどころか、最近ではインターネットの発展や住環境の都市化によって人間どうしの交流さえも希薄化し、家族ばらばらで食事をするという家庭も珍しくないようです。少々前は、近所で醤油を貸したり多くできたおかずを分け合ったりしていた日本人が、現代では、隣に住んでいる人の顔も知らない、家族で食事をするのは年に一回しかないなど、信じられないような話を聞くことがあります。

今年、ユネスコの世界遺産に「和食」が登録されるといいます。そして勤労感謝の日として今年も新嘗祭や神嘗祭が行われます。伊勢神宮の式年遷宮の年に、このような日本の文化や思想が世界遺産に登録されるというのも何かの縁ではないでしょうか。もう一度その主役であるはずの日本人が、和食や日本食に関して考え直してみてもいいのではないでしょうか。